

キリスト教保育養成校における課題と展望についての一考察

前 田 美和子*

(2015年11月13日 受理)

The Issues and the Future of Christian Nursery Training School

Miwako MAEDA*

The Department of Child Education and Philosophy of Hiroshima Jogakuin University is going to be 10 years from its establishment. This university is the only one University based on Protestant education in Hiroshima prefecture. The Department of Child Education and Philosophy in this University is the only one training school for preschool educators based on Christian education. Therefore, the expectation from Christian kindergartens and nursery schools is very high, and the implementation of education that meet the expectation is one of the mission of the department. Thus, for this thesis, interviews were taken from 4 graduate students of this department who were employed to the Hiroshima Jogakuin Gaines Yochien located in Hiroshima Jogakuin University. This thesis will analyze how the approaches and the learnings in this department are applied to the real education in Christian kindergartens and nursery schools, and show the points that can be developed in concrete.

Keywords: Training of preschool educators 保育養成校, Interview analysis インタビュー調査, Nursery based on Christianity キリスト教保育

1. はじめに

本学の幼児教育心理学科は、学院創立120周年を記念して創設され、来年で10周年を迎える。本学は広島県内唯一のプロテスタント主義大学であり、また本学科は県内唯一のキリスト教保育養成校である。そのため、県内のキリスト教主義幼稚園および保育所からは、個人的にはあるが期待の声を耳にする。またその期待に応える教育の実践は、本学科の使命の1つと言えるであろう。

そこで本学本学科を卒業後、同じ広島女学院にあるゲーンズ幼稚園に就職した卒業生4名に、本学科での学びと幼稚園での実践についてインタビュー調査を行うこととした。本稿では、インタビューを通して本学の取り組みや本学科の学びが、キリスト教主義幼稚園および保育所の実践の場でどのように用いられているのか、また改善すべき点がどこにあるのかを具体的にしめしたい。

2. 調査方法

本学卒業生の現役ゲーンズ幼稚園教諭で、勤務年数は

3年目が1名、2年目が1名、1年目が2名の計4名である。いずれも未洗礼者である。

インタビューは本学文学館第二会議室にて、4名の教諭と論者が司会を務め、計5名で90分間行った。

3. 考察

以下、インタビュー内では司会者をMとし、幼稚園教諭は各項目とも発言順にA, B, C, Dとする。

(1) 幼稚園内における礼拝について

A: クラスで月曜の礼拝をしましょうというのがあるけど、他の曜日になったりする。一応、クラスで礼拝をするようになっています。

M: 朝ですか？

A: 決まっていないです。

M: 何分くらいですか？

A: 別に時間は決まなくて、年長さんなら自分たちの身近な話をされたり、年少さんには時間を短くする配慮をしながら、伝えるべきことをコンパクトにして話しています。

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科専任講師

M：月曜日の礼拝で扱う聖書箇所などは決まっていますか？

B：年中では月曜ではなくて木曜日にやっています。クラスの予定に合わせて担任が決めています。年中では3クラスの担任が集まって、どこを話すか決めています。

M：それはテキストがあるのですか？

B：聖書は、たとえばノアの方舟をしようと決めたら、聖話¹⁾のテキストを何冊か選んで、子どもたちにわかりやすく、でも、聖書の言葉をかき消さないようにつとめています。

M：他の学年はどうですか？

C：年少は一応話し合いの中で今週のカリキュラムを話し合っています。話の内容をそこで決めます。

D：年長は決まっていることもあるけど、目の前の子どもたちの様子にそってその内容を話しています。

ゲーンズ幼稚園の場合、『広島女学院ゲーンズようちえん 再開園50周年記念誌』（pp. 42, 2012年）には朝の礼拝が50年間毎朝欠かさず行われている様子が掲載されているが、それ以外にも、基本的に週に1度、クラス単位で礼拝がまもられている。年少や年中の場合、学年ごとにある程度共通の聖書箇所やテーマを決めているが、年長は子どもたちの様子を見ながら、教諭が子どもたちの状況にあった話をしていることがわかった。またインタビューからは、いずれの教諭も聖書以外のテキストを用いながら聖話を考えていることがわかった。

教諭らの教会出席状況は、クリスマスや花の日、収穫感謝やイースターなど、幼稚園で行われる大きな宗教行事前を中心に行っているようである。

そこで、教会での説教や聖書を学ぶ会等を通して日常的に聖書の内容に触れていないのであれば、どのようにして聖話を語るための準備をしているのか問うことにした。

M：ほぼ毎週礼拝子どもたちにお話するのは大変ではないですか？大学で聖書を開く授業は「キリスト教学入門Ⅰ・Ⅱ」や鈴木先生²⁾の授業くらいだったと思います。語ることの出来る聖書の話たくさん習っていないと思うのですが、どのようにお話をされていますか？

A：聖書を読んでいるのではなく、聖書のお話を子どもにわかりやすく話すテキストが何冊もあるので、私は聖書を直接読んでいるのではなくて、子どもに聖書のお話を伝えるためのテキストからお話を考えています。

M：そのテキストは園にあるのですか？

全員：あります。

A：4月に本も買います。キリスト教保育連盟から出ている、園の研修会で聖書や讃美歌、『泉のほとりで』³⁾を売っていて、買った方が良く先輩先生に伺って買っています。また、園の絵本をコピーして自分で読んで話を作っています。

M：他の先生方もですか？

B, C, D：はい。

M：では、大学で聖書のお話をあまり習わなかったために園で話をするようになった時に困ったと感じますか？

全員：（うなずく）

A：感じました。

この会話から、少なくともゲーンズ幼稚園で働いている卒業生の全員が、自分で聖話を語るにあたって大学での学びが不十分であったと感じていることがわかった。

現在、本学で毎週学生に提供しているキリスト教関連科目や礼拝等の行事は、主に3つある。

1つ目に、1年生の必修科目の「キリスト教学入門Ⅰ」「キリスト教学入門Ⅱ」の授業である。当時のシラバスを参考資料として付すが⁴⁾、この授業は主にキリスト教の概論を学ぶことを目的としている科目である。また、現在は国際教養学科、管理栄養学科、生活デザイン・建築学科など、他学科とシラバスと成績基準を一律に定めている科目である。授業では当然、聖書の中にあるいくつかのたとえ話や物語も扱うが、そもそもそれらは幼児教育の現場においてそのまま使えることを想定して授業内で扱われてはいない。よって、この授業で学んだことを聖話として用いるには無理がある。

子どもに聖書の話語るに際し、レギーネ・シントラー（1992）や赤崎ら（2009）は、抽象的な教理を教えるのではなく、物語を通して子どもたちに神様が共にいてくださるという追体験をさせることが大事であるという。同時に、語る者は聖書に記されている事柄の歴史的背景や地理的状況、当時の風俗習慣についても知っている必要があり、それらの知識を得るために聖書解釈や注解書、事典を参照する必要があると述べている。

キリスト教の概論を扱う「キリスト教学入門Ⅰ」「キリスト教学入門Ⅱ」では、こういった聖書やキリスト教の背景について語ることが度々ある。インタビューを通して得られた印象として、これら概論で得たキリスト教に対する知識と、現場で子どもたちに語る言葉に、教諭の中に乖離傾向がみられる。しかしこれら概論で得た知識が、将来的に子どもたちに聖話を語る上で必要となるこ

とを、本学科の学生を対象にした授業時に語ることが大切であることがわかった。

本学が提供しているキリスト教関連科目や行事の2つ目は、毎週火曜日に礼拝形式で行われる「キリスト教の時間」である。現在「キリスト教の時間」は「キリスト教学入門Ⅰ・Ⅱ」と連動しており、1年生のほとんどが出席している。この時間は本学の建学の精神の共有を目指しており、女性・世界・平和・人権などのテーマについて語る講師を招き、その講演によって建学の精神の理解を深めている。聖書朗読や祈祷、讃美歌も用いるが、講師によっては必ずしも聖書に基づいた話がなされるわけではない。

3つ目に木曜日チャペルである。語り手および出席者は学内関係者が中心である。ここでも聖書朗読や祈祷、讃美歌が用いられている。聖書について語られることもあるが、教職員による講話や学生の活動発表も多くある。ここで聴いた話も聖話として未就学児に語ることは難しいと言える。

このほか、隔年開講の選択授業で「キリスト教学Ⅱb」が3年前より開講された。主にキリスト教幼児教育学を扱っており、聖話作りや日々の祈り、礼拝などキリスト教保育の現場における実践的な事柄を扱って授業を展開している。しかし選択科目であるため、複数の免許取得を目指す学生には単位オーバーとなり、実際の履修はよほどでない限り困難な状況にある。

次に、大学での学びに改善の余地が見られたため、大学での学びについての要望を聞くことにした。

(2) 大学での学びについて

M：大学の学びにはどんな要望がありますか？

A：私は「神様ってなに？」の時点からわからなかった。子どもから「神様ってなに？」「イエス様ってどんな人？」って聞かれてもわからなくて、伝え方がわかりませんでした。お祈りをなぜするのかもわからず、基本的なことを子どもたちにどう伝えて良いのか不安で、礼拝を重ねていたり、ベテランの先生のお話を聞く中で理解をしていったけど、最初は自分の考えで良いのかわからないし、子どもたちにどう伝えて良いのかわからなくて不安が大きかったです。

M：大学でどうしておけば良かったと思いますか？

A：大学では理論的なことを学んで、それはそれで大切だと思うし、キリスト教にふれたこともなかったの、そこも必要だったけど、幼児教育に特化するのであれば、学んだ理論的なことを子どもたちにどのように伝えていけば良いのか、ということも学べたら良かったです。

B：聖話では、自分の知らない話が多くて何冊も（テ

キストを）読むのですが、1回読むだけでは意味がわからなかったり、（自分の）解釈があっているのかわかりません。何回も読むとわかってくるけど、それを子どもに伝えるとなると自分の曖昧な解釈で良いのか、それを深めていかなければならないけど、解釈があっているのかわからないので、大学で子ども向けの聖話を学ぶ機会がなかったの、少しでもそういう聖話にふれる授業があれば、自分の中に最初にあった壁が和らいだのではないかと思います。

C：お話をしていく中で、キリスト教の中でどういう大きな行事があるか、勤務して初めて知ったことが多かったの、大学で大まかな行事や礼拝が何かをわかっていたら、入った時にすんなりと理解できたのではないと思う。就職して1から学ばなければならなかった。大学でキリスト教の基本や理念を学べたのは良かったですが、大学に入った時はクリスチャンではなかったため、何のことかわからないことが大きかったです。大学でも実践的なことが学べたら良かったと思います。聖書を読んだだけでは難しく理解できないことがあったので、子どもに伝えるために読んでいる『泉のほとりで』にわかりやすく書いてあるので理解しやすいし、聖書だけではないテキストがあったらわかりやすいと感じます。

D：大学時代に4年間で讃美歌を授業で弾いてなかった。讃美歌を歌うのも1年生の時に「発表するために歌う」という感じだったけど、発表前に先輩方の讃美歌発表の映像を観て、使う曲もほとんど同じだったし、もう少し大学で歌う機会があれば良かったと思う。

教諭たちは毎週の礼拝で聖話を語ることから、聖話についての要望があがることは予測していたが、それ以外にもキリスト教関連行事や、讃美歌を学びたかったという、実践的な学びを求める声があがった。

讃美歌に関しては、本学科では1期生の頃より毎年1月の「キリスト教の時間」において「こどもさんびかをうたいましょう」という発表の機会を設けている。「こどもさんびかをうたいましょう」は、ゲーンズ幼稚園の園児たちを招き、本学科の1年生が『こどもさんびか』や『幼児さんびか』を用いながらステージ発表をするものである。ここで用いられる讃美歌は、主に春学期開講の「初年次セミナー」で、本学チャペルオルガニストであり日本基督教団讃美歌委員の玉理照子によって選ばれた讃美歌や、「キリスト教の時間」で歌った曲がほとんどである。またインタビュー内にあった通り、これまでの先輩方が「こどもさんびかをうたいましょう」で用いた讃美歌を使用する場合もある。

本学科の学生が4年間を通して習う讃美歌は、平均して約60曲弱である。とは言え、実際に学生たちが歌う機会は1年次に集中しており、また60曲の中でも特に決まった讃美歌しか歌わない傾向にあるのが実情である。

インタビューからは、神様を賛美するために讃美歌を歌うという意識よりむしろ、「(『こどもさんびかをうたいましょう』で)発表するために歌う」という意識が学生の中にあることがわかったが、賛美歌の意味や意義について語られることは、4年間を通しておそらく「初年次セミナー」と、「キリスト教の時間」で行われる春学期と秋学期のそれぞれ最初にある「讃美歌を歌おう」が中心となっている。

『新キリスト教保育指針』(pp. 40, 2014年)には、賛美歌は神様への感謝や喜びを表すだけでなく、子どもの心に留まって生涯に影響を与えかねないものであることも述べられており、学生たちに讃美歌を歌う意義を今後伝える必要がある。また、『新キリスト教保育指針』には讃美歌の選曲は重要であり、それは保育者が普段から讃美歌に親しむことによって適切な選曲につながるとしているため、学生たちには4年間を通じてより多くの讃美歌にふれる機会と、その意味や意義について学ぶ機会を提供していく必要があろう。

しかしインタビューの中で、「もしも聖話や讃美歌を扱った実践的な授業が開講されていた場合、受講または聴講したか」という問いかけに対し、1名は「受講する」と答えたが、残りの3名は「受講できない」との答えが返ってきた。なぜならば、3名とも幼稚園教諭、保育士、小学校教諭やカウンセリング実務士など複数の免許取得を目指していたり、公務員試験対策講座を受講しており、かなり多くの授業単位を取得しなければならない状況にあった。そのため、選択授業であれば単位オーバーになり、物理的に受講することが出来ないからである。また課題も多く、空き時間にそれらの課題に取り組んでいたため、聴講する心的余裕もなかっただろうという答えが返ってきた。

(3) キリスト教主義の園に就職する意識について

広島はもともと安芸門徒が多い地域で、異教であるキリスト教が浸透するまでかなり苦労があったと聞く。キリスト教主義をうち出してきた本学の歴史を紐解いてみると、先達が苦労しながら学院を守ってきたことがわかる。そこで、就職先にキリスト教主義の園を選んだ意識について問うた。

M: キリスト教主義の園に就職するにあたって、不安や信仰が違うという違和感や抵抗感がありましたか？

A: 宗教に対しての抵抗感はなかった。大学でキリスト教に触れてきたので。でも、就職が決まって子どもに(聖書の話)を話す立場になるというのは不安でした。ゲース幼稚園に対しては、まずキリスト教のイメージがなく、実感はありませんでした。

M: キリスト教保育と意識せずに就職したのですか？

A: キリスト教主義のゲース幼稚園という意識はありました。そこまで意識する抵抗感はなかったです。でも実際に入ってみて、子どもたちに話さなければならなくなった時に大変だと思うようになった。

B: 聖話を1週間に1回話すことも自分が担任になるのが近づいて知りました。今、前田先生の話聞いて、キリスト教の園に対しての抵抗感はないけど、これが仏教系の園だったらどうだったのかなって考えました。もともと実習もキリスト教の所に行っていて、キリスト教が素敵だと感じていて、キリスト教に抵抗はありません。でも、仏教の園だったら、もしかしたら抵抗感はあったかもしれないと思いました。でも私も仏教徒ですが。

今は聖話を学生時代に学んでおけば良かったと思うけど、キリスト教の園で聖話があるのは、実習の終盤に聞いたので。週に1回聖話をしなければならないことを知らなかった。園によって違うかもしれないけど、M: 園によって違うと思います。

M: キリスト教主義に対する抵抗は、特に宗教センターの行事に参加しなくても、女学院にいるということでハードルが低くなったのですか？

A: 「キリスト教の時間」や授業でキリスト教の考え方を聞いて、今までキリスト教を知らなかったけど、簡単に言えばキリスト教の考え方が隣人愛とか優しい考え方、あたたかな考え方、素敵な考え方だと感じてハードルは下がっていったと思います。

B: 私はゲース幼稚園に就職が決まってから先輩の先生方のクラスに入って、自分も学んでいく中で聖話を聞いたり、お祈りやお話を知りました。でも自分でするのはいくらキリスト教主義の大学を出ていても、子どもたちの前でそれをする責任がすごく強くあって、本当に自分で伝えることが出来るのか、お祈りが出来るのかという不安が大きかった。でも、Aさんの言う通り、授業や「キリスト教の時間」を聞く中で、人との接し方や子どもの接し方という面ではキリスト教に抵抗なく働いています。技術面は不安が大きかったです。

M: 今はその責任はどうですか？

B: 少しずつ慣れてきました。でもお話となると、これで良かったのか、子どもたちの心に届いているのか、目に見えないぶん不安ではあります。でも、子どもたちのいろんな場面を見て「これでいいのかな？」

と確認する部分があります。

C: 私はゲース幼稚園出身で、讃美歌を歌ったりお祈りすることは日常でした。小学生になっても心の中でお祈りしていたし、自然と身についていたのでキリスト教という抵抗感もなかったです。ゲース幼稚園に入る時もなかったです。

ここでは2名が本学で学ぼうちにキリスト教に対する抵抗感が薄らいでいったことを語っているが、ここでも子どもたちの前でキリスト教について語ることにに対する不安が語られており、いかにその不安が大きいかわわってきた。

最後に、本学のキリスト教主義教育についての要望を聞いた。

(4) 本学のキリスト教主義教育についての要望

M: 本学のキリスト教主義についての要望を教えてください。

全員: 幼心⁵⁾なら讃美歌、聖話、行事、お祈り。

A: お祈りを習うことはなかった。鈴木先生の授業と「キリスト教の時間」だけで、あんまりキリスト教の学校に通っているという実感が普段の生活ではなかった。せっかくキリスト教の学校という素敵なところなので、もっと身近にお祈り等を通して感じたかった。

B: (授業では) 行事はまったくやってなかったし、キリスト教の園に勤めているからかもしれないけど。

A: でもキリスト教の大学にいたんだから、キリスト教主義の園に勤めるかどうかは別として、幼心がキリスト教保育なんだから、キリスト教保育を学ぶ場なんだから1年や2年でももっと。

C: 実習もキリスト教主義の園が多いし。2年でゲース幼稚園に実習に行って、初めて子どもたちのお祈りをする姿を見て驚いた。実習の前に幼稚園の先生はキリスト教主義つながりという目で見られていると思うのに、学生が無知です。

ここからは、キリスト教主義大学として、キリスト教保育の実践面だけでなく、お祈りなどを通して精神的にもキリスト教を感じていたかった様子がうかがえる。補足であるが、現在私が担当する「キリスト教学入門Ⅰ」「キリスト教学入門Ⅱ」「キリスト教学Ⅱb」では、すべて学生が祈って欲しいという事柄を募り、毎回お祈りから授業を開始しており、一定の効果がえられる⁶⁾。また、2013年より大学のチャペル内に「祈りのポスト」という箱を作り、祈って欲しい事柄を自由に記入して投函する

システムがある。そして希望があれば「キリスト教の時間」でチャブレンか宗教主任のリードで祈ることになっている。そのため祈りという点については、拙稿を参照いただきたいが、以前より学生たちにとって身近なものとなっているはずである。また、B氏は「行事をまったくやっていない」と言うが、少なくともクリスマスは授業でリースを作って学内に飾っているの、「まったく」ではないはずである。授業で学んだことと実践との意識付けが薄いのかもしれない。

最後に、本学のキリスト教主義教育をどの程度打ち出すかという点においては、インタビューの後に以下のようなやりとりがあったことも加えておく。

A: 謝恩会で先生方と話していて思ったのは、園長先生が話された時に、自分はすんなり「神様に赦されている自分」という話が心にしみたけど、意味がわかっていない子もいて、キリスト教主義が浸透していないのを感じました。せっかくキリスト教の学校にきたのに、あたたかい言葉も心に入らないのかあと残念だった。大学を卒業したらキリスト教は関係ないと思っている人もいだろうということを感じました。でも、神様が私を赦して下さるという考えには救われて、そういう考えが学生時代に感じられることを語られる先生や機会が増えたら良いと思います。

B: 今、大学の友だちに園で神様のお話をするとすると「無理無理」という反応をする子もいるから、大学は今くらいのキリスト教で良いのかなと思ったもする。

今回インタビューに答えた4名は、実際にキリスト教主義の園に勤め、キリスト教に対する抵抗感も就職する段階でほとんどないと言えるが、このやりとりからは、本学で4年過ごしても、必ずしもキリスト教やキリスト教主義教育に理解を示している学生だけではないことがわかる。このことは、キリスト教保育を学外にも打ち出し、学外からもキリスト教保育養成校として期待の声を受けている場として、今後課題にしていきたい事柄である。

4. まとめ

今回のインタビューから、本学での学びがキリスト教やキリスト教保育に対して理解を示すようになった学生がいることも明らかになったが、そういった学生たちがキリスト教主義の幼稚園や保育所に就職した際、実践面、特に聖話や讃美歌で不安を抱え、学生時代にこれらを学ぶ必要性を大いに感じていることがわかった。本学の卒業生は必ずしもキリスト教主義の園に就職するわけ

ではないが、キリスト教保育養成校として、より実践を意識した授業展開が必要と言えよう。

今回は実践面の課題が中心にインタビューが進んでいったが、今後は実践面に留まらず、キリスト教保育の理念が学生たちにどのように伝わり活かされているのかについても調査し、研究を進めたい。

注

- 1) インタビューの中では聖書に基づく話を「聖話」と呼んでおり、以下本論では、聖書に基づく話を「聖話」で統一することとする。
- 2) 鈴木道子は元ゲース幼稚園園長であり、現在学校法人広島聖公会学園聖モニカ幼稚園園長、本学科特任教授。現在本学での担当科目は「子どもと遊びⅢ」「保育内容総論」「保育内容（人間関係）」「幼児と環境」「初等教育実習Ⅰ」「初等教育実習Ⅱb」「初等教育実習Ⅳ（事前・事後指導）」（2015年度）。
- 3) 吉村和雄、『泉のほとりで』，キリスト品川教会出版局，2002年。
- 4) 巻末に担当者に許可を得て2009～2011年度の「キリスト

教学入門Ⅰ」「キリスト教学入門Ⅱ」のシラバスを添付した。

- 5) 「幼心」は幼児教育心理学科の略。通常「幼心」と呼ばれている。
- 6) 授業前の祈りについては、前田美和子：祈りによる学生の意識変化について—広島女学院大学の場合—，広島女学院大学人間生活学部紀要，創刊号，pp. 71～77，2013年。に記している。

引用文献

- 再開園50周年記念誌編さん委員会：広島女学院ゲースようちえん 再開園50周年記念誌 1962～2012，牛田ゲース出版，pp. 42，2012。
- レギーネ・シントラー著，加藤善治，茂純子，上田哲世訳：希望への教育 子どもとキリスト教，日本基督教団出版局，pp. 53，1992。
- 赤崎ユリ子，尾上明子，茂純子，松浦八恵子：レギーネ・シントラーの「希望へと育む」～要約と解説～，一誠社，pp. 71，2009。
- キリスト教保育連盟：新キリスト教保育指針，キリスト教保育連盟，pp. 40，2014。

参考資料

講義科目名称：		
キリスト教学入門Ⅰa		
英文科目名称：		
—		
授業コード：		
開講期間	配当年	単位数
春期	1年～	2単位
担当教員	澤村 雅史	
授業の目的	<p>1. 本学の土台であり柱であるキリスト教について、理解を深める。</p> <p>2. その「正典」である聖書について、理解を深める。</p> <p>3. とくに、古代の文書である聖書が、なぜ、どのようにして、現代の私たちの生活に関わりを持つのか、さまざまな読み方を通じて、理解を深める。</p>	
授業計画	<p>第1回</p> <p>1. オリエンテーション</p> <p>2. あなたに「宗教」は必要か？ 「宗教」と「宗教性」、「宗教」と「迷信」</p> <p>第2回</p> <p>3. キリスト教の基礎知識</p> <p>(1) イエス・キリストとはだれか</p> <p>(2) 律法と神殿祭儀 のび太の「ぐうたら感謝の日」がうまくいかなかった理由</p> <p>第3回</p> <p>(3) なぜ十字架がキリスト教のシンボルとなるのか。</p> <p>第4回</p> <p>4. 旧約聖書概論</p> <p>(1) 旧約聖書の構成となりたち</p> <p>第5回</p> <p>(2) 旧約聖書への扉 その1 「出会い」にドキドキ～族長史</p> <p>第6回</p> <p>(3) 旧約聖書への扉 その2 「いつもここから」～出エジプトと「契約」</p> <p>第7回</p> <p>(4) 旧約聖書への扉 その3 「普通の国」って？～「律法」と王国史</p> <p>第8回</p> <p>(5) 旧約聖書への扉 その4 「ピンチはチャンス！」～危機と「預言」</p> <p>第9回</p> <p>(6) 旧約聖書への扉 その5 「読み方上手」～原初史と様々な解釈</p> <p>第10回</p> <p>(7) 旧約聖書への扉 その6 「神様って本当にいるの？」～知恵文学と神義論</p> <p>第11回</p> <p>(8) 旧約聖書への扉 その7 「明日に賭ける橋」～黙示文学</p> <p>(9) まとめ</p> <p>第12回</p> <p>5. 新約聖書概論</p> <p>(1) 新約聖書の構成となりたち</p> <p>第13回</p> <p>(2) 新約聖書への扉 その1 「ゴスペル＝エヴァンゲリオン＝福音書」</p> <p>第14回</p> <p>(3) 新約聖書への扉 その2 「ラブレター・フロム・サンパウロ」</p> <p>第15回</p> <p>(4) 新約聖書への扉 その3 「終わりから今・ここを見る～ウルトラマンとキング牧師から学ぶ」</p> <p>(5) まとめ</p>	
授業成果		
テキスト	新共同訳聖書 日本聖書協会	
参考書	授業中に指示します。	
成績評価の方法	<p>(1)出席点(10%)</p> <p>(2)「キリスト教の時間」についてのレポート(チャペルレポート)を書く(20%)</p> <p>(3)学期末試験の成績(70%)</p>	
その他	<p>この授業ではチャペル出席をフィールドワークとして位置付けます。</p> <p>(1)火曜日「キリスト教の時間」に積極的に出席して下さい。</p> <p>(2)「チャペルレポート」について、授業中に指示した規定回数以上の提出を学期末試験の受験条件とします。</p>	
参考URL		
ベンチマーク		

講義科目名称：		
キリスト教入門Ⅱ a		
英文科目名称：		
—		
授業コード：		
開講期間	配当年	単位数
秋期	1 年～	2単位
担当教員	澤村 雅史	
授業の目的	1. 本学の土台であり柱であるキリスト教についての理解を深め、 2. それが、「いま」・「ここ」を生きる自分に、なぜ、どのようにして関わりを持つのか、を考えることを通じて、 3. 複雑化する社会においてなお、各自がそれぞれ拠って立つ価値観を確立する一助となる講義を目指す。	
授業計画	第1回 I. はじめに～オリエンテーション 第2回 II. 歴史 キリスト教の歴史～聖書翻訳史を通じて(1) ・翻訳とは何か? 「少量法律助言者」の例から ・聖書の古代訳 ガイコツ片手に今日もコソコソ 第3回 キリスト教の歴史～聖書翻訳史を通じて(2) ・宗教改革と「標準語」 ・翻訳は火あぶりの刑! ? 第4回 キリスト教の歴史～聖書翻訳史を通じて(3) ・日本語訳の歴史 「ハジマリニカシコイモノゴザル」 ・翻訳の限界と可能性 第5回 キリスト教の歴史～「キリスト教と笑い」を通じて(1) ・笑いとは ・「誰も笑ってはならぬ」 第6回 キリスト教の歴史～「キリスト教と笑い」を通じて(2) ・笑いとは ・笑いとは宗教 ・笑いとは治癒力 第7回 III. 現在 キリスト教と現代～IT(インフォメーション・テクノロジー)とキリスト教(1) ・IT社会の現状 ・IT社会の明暗 第8回 キリスト教と現代～IT(インフォメーション・テクノロジー)とキリスト教(2) ・「ゲーテンベルクの銀河系」から「グーグルの銀河系」へ 第9回 キリスト教と現代～IT(インフォメーション・テクノロジー)とキリスト教(3) ・「情報倫理」とキリスト教 第10回 IV. 未来 「主の祈り」に学ぶ(1) ・「天」ってどこ? 第11回 「主の祈り」に学ぶ(2) ・広がりゆく「我ら」～隣人として生きる 第12回 「主の祈り」に学ぶ(3) ・「日ごとの糧」 第13回 「主の祈り」に学ぶ(4) ・「祈り」とは 第14回 「主の祈り」に学ぶ(5) ・さまざまな「主の祈り」 第15回 V. まとめ	
授業成果		
テキスト	新共同訳聖書 日本聖書協会	
参考書	授業中に指示します。	
成績評価の方法	(1)出席点(10%) (2)「キリスト教の時間」についてのレポート(チャペルレポート)を書く(20%) (3)学期末試験の成績(70%)	
その他	この授業ではチャペル出席をフィールドワークとして位置付けます。 (1)火曜日「キリスト教の時間」に積極的に出席して下さい。 (2)「チャペルレポート」について、授業中に指示した規定回数以上の提出を学期末試験	
参考URL		
ベンチマーク		

キリスト教保育養成校における課題と展望についての一考察

講義科目名称：		
キリスト教入門Ⅰa		
英文科目名称：		
—		
授業コード：		
開講期間	配当年	単位数
春期	1年～	2単位
担当教員	澤村 雅史	
授業の目的	1. 本学の土台であり柱であるキリスト教について、理解を深める。 2. その「正典」である聖書について、理解を深める。 3. 古代の文書である聖書が、なぜ、どのようにして、現代の私たちの生活に関わりを持つのか、さまざまな読み方を通じて、理解を深める。 4. イエス・キリストの教えと行いから、「クリティカル・シンキング」を学ぶ。 5. 一方で、人の「いのち」を活かし、尊厳・自由・平等をもたらす宗教が、他方ではなぜ人の「いのち」を奪い、尊厳・自由・平等を脅かすのかを、ともに考える。	
授業計画	第1回 <はじめに> ・導入 ・なぜキリスト教を学ぶのか ・諸注意 第2回 <広島女学院とキリスト教> ・ゲーンズ先生と“CUM DEO LABORAMUS” ・「キリスト教の時間」について 第3回 <キリスト教の基礎知識> ・キリスト教のさまざまなかたち～音楽から ・キリスト教のさまざまなかたち～絵画から ・「キリスト教」の定義 第4回 <聖書とは> ・「正典」(カノン)について ・聖書を開いてみよう 目次・付録・章と節 ・聖書の構成と各書巻 ・内容解説 第5回 <イエス・キリストとは(1)> ・イエス・キリストの時代 ・「イエス・キリスト」という名前 第6回 <イエス・キリストとは(2)> ・イエス・キリストの活動 ・十字架と復活 第7回 <「宗教」を乗り越えて(1)> ・契約・律法・十戒 ・のび太の「ぐうたら感謝の日」はなぜうまくいかなかったのか？ ・「宗教」の倒錯 第8回 <「宗教」を乗り越えて(2)> ・「いのち」の食べ方 ・モモと時間どろぼう～「計量思考」を乗り越えて 第9回 <「愛」—律法が求めるもの(1)> ・トルストイ・有島武郎・桜井和寿 ・「愛」とは「する」こと・「しない」こと I コリント13章より 第10回 <「愛」—律法が求めるもの(2)> ・愛の反対は？ ・「隣人」に「なる」 ・「そうぞうりょく」 第11回 <十字架と復活(1)> ・処刑の道具から愛のシンボルへ ・パッション—イエスの受難物語 第12回 <十字架と復活(2)> ・「愛」の究極の実践 ・「復活」とは 第13回 <「奇跡」について> ・笑いと治癒力 ・病と差別 ・WHOの「健康」の定義 第14回 <「奇跡」についてどう考えるか(2)> ・事実と真実(真理) ・真理はあなたがたを自由にする 第15回 <まとめ>	
授業成果		
テキスト	聖書<新共同訳> 日本聖書協会	
参考書	授業中に指示します。	
成績評価の方法	(1)出席点(10%) (2)チャペルレポート (20%) (3)学期末試験の成績 (70%) ※授業回数の3分の1を超える欠席は失格とします。	
その他	◇予習について この授業では火曜日「キリスト教の時間」への出席を、授業の予習と位置づけま す。 (1)火曜日「キリスト教の時間」に積極的に出席して下さい。 (2)出席した回についてレポートを書いて提出してください。規定回数以上の提出 を学期末試験の受験条件とします。詳細は授業中に指示します。 ◇復習について 授業で扱ったキーワード・概念などでわからないものがあれば次回授業までに調べ ておくこと。調べてなおわからない部分については積極的に質問すること。調べる 方法については授業中に順次指示します。	
参考URL		
ベンチマーク		

2010年度春学期「キリスト教入門Ⅰ」シラバス

副読科日名称：		
キリスト教入門Ⅱa		
英文科日名称：		
—		
授業コード：		
開講期間	配当年	単位数
秋期	1年～	2単位
担当教員		
澤村 雅史		
授業の目的	<p>1. 本学の土台であり柱であるキリスト教について、理解を深める。</p> <p>2. 前期「キリスト教入門Ⅰ」に続いて、古代の文書である聖書が、なぜ、どのようにして、現代の私たちの生活に関わりを持つのか、さまざまな読み方を通じて、理解を深める。</p> <p>3. 人間の根本にある「宗教性」（霊性・スピリチュアリティ・帰依心）に気づき、「祈り」について学ぶことで、心と感性の豊かさを育てるきっかけとする。</p> <p>4. キリスト教的歴史観・世界観における「創造」と「終末」について学び、「いま・ここ」に生きる「意味」を各々が喜びをもって見出すきっかけとする。</p>	
授業計画	<p>第1回 <はじめに></p> <p>第2回 <霊性(スピリチュアリティ)の時代を生きる(1)></p> <p>第3回 <霊性(スピリチュアリティ)の時代を生きる(2)></p> <p>第4回 「祈り」について(1)</p> <p>第5回 「祈り」について(2)</p> <p>第6回 <「主の祈り」に学ぶ(1)> ・「天」ってどこ？</p> <p>第7回 <「主の祈り」に学ぶ(2)> ・広がりゆく「我ら」～隣人として生きる ・「日ごとの糧」と「仮想水」</p> <p>第8回 <「主の祈り」に学ぶ(3)> ・「ゆるす」こと ・「悪」とは何か ・戦争と正義</p> <p>第9回 <「主の祈り」に学ぶ(4)> ・さまざまな「主の祈り」</p> <p>第10回 <ささげること・わかちあうこと> ・「自己責任論」が生み出したもの ・「クリスマス精神」について</p> <p>第11回 <創造と終末―「創造」(1)> ・歴史と歴史観 聖書の歴史観 ・「この世はみな神の世界？」―希望の神学</p> <p>第12回 <創造と終末―「創造」(2)> ・セレブじゃなくても「神の像」</p> <p>第13回 <創造と終末―「終末」(1)> ・人類は滅亡が好き？ 映画に見る「終末」 ・偽予言とカルト宗教</p> <p>第14回 <創造と終末―「終末」(2)> ・希望としての終末論 「いま・ここ」を生きるあなたへ</p> <p>第15回 まとめ</p>	
授業成果		
テキスト	聖書<新共同訳> 日本聖書協会	
参考書	授業中に指示します。	
成績評価の方法	<p>(1)出席点(10%)</p> <p>(2)チャペルレポート (20%)</p> <p>(3)学期末試験の成績(70%)</p> <p>※授業回数の3分の一を超える欠席は失格とします。</p>	
その他	<p>◇予習について</p> <p>この授業では火曜日「キリスト教の時間」への出席を、授業の予習と位置づけます。</p> <p>(1)火曜日「キリスト教の時間」に積極的に出席して下さい。</p> <p>(2)出席した回についてレポートを書いて提出してください。規定回数以上の提出を学期末試験の受験条件とします。詳細は授業中に指示します。</p> <p>◇復習について</p> <p>授業で扱ったキーワード・概念などでわからないものがあれば次回授業までに調べておくこと。調べてなおわからない部分については積極的に質問すること。調べる方法については授業中に順次指示します。</p>	
参考URL		
ベンチマーク		

講義科目名称：		
キリスト教学入門Ⅰb（英）		
英文科目名称：		
—		
授業コード：		
開講期間	配当年	単位数
春期	1年～	2単位
担当教員		
辻 学		
授業の目的	キリスト教という宗教およびその教典である聖書への導入。キリスト教と聖書について学ぶ中で、人間や私たちの生きている世界についての理解を深めていく。	
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 旧約聖書概説 第3回 天地創造物語 第4回 アダムとエバの物語(1) 第5回 アダムとエバの物語(2) 第6回 洪水物語(1) 第7回 洪水物語(2) 第8回 バベルの塔の物語 第9回 アブラハム物語(1) 第10回 アブラハム物語(2) 第11回 アブラハム物語(3) 第12回 イエス(1) 第13回 イエス(2) 第14回 イエス(3) 第15回 パウロ	
授業成果		
テキスト	〔改訂新版〕現代を生きるキリスト教 芦名・土井・辻 教文館 2004	
参考書		
成績評価の方法	試験50%、出・欠席（遅刻）20%、提出物（「キリスト教の時間」レポート）30%。なお授業中の私語等は減点と共に退出対象とする。	
その他	「キリスト教の時間」レポートについては、第1回講義時に説明する。テキストは後期の授業でも同じものを使用する。	
参考URL		
ベンチマーク		

講義科目名称：		
キリスト教学入門Ⅱb（英）		
英文科目名称：		
—		
授業コード：		
開講期間	配当年	単位数
秋期	1年～	2単位
担当教員		
辻 学		
授業の目的	私たちの生活や社会を取り巻く様々な問題を取り上げ、キリスト教および聖書がそれらの問題にどのような視点を提供しているかを学んでいくと同時に、キリスト教的な発想に親しんでいく。	
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 旧新約聖書概観（復習） 第3回 家族の危機と再生(1) 第4回 家族の危機と再生(2) 第5回 富・貧・欲望(1) 第6回 富・貧・欲望(2) 第7回 民族主義と平和(1) 第8回 民族主義と平和(2) 第9回 私たちの生命(1) 第10回 私たちの生命(2) 第11回 環境破壊とキリスト教(1) 第12回 環境破壊とキリスト教(2) 第13回 世の終わり(1) 第14回 世の終わり(2) 第15回 まとめ	
授業成果		
テキスト	〔改訂新版〕現代を生きるキリスト教 芦名・土井・辻 教文館 2004年	
参考書		
成績評価の方法	定期試験50%、提出物（「キリスト教の時間」レポート）30%、出・欠席（遅刻）20%。なお授業中の私語等は減点と共に退出対象とする。	
その他	教科書は、前期開講の「キリスト教学入門Ⅰb」および「Ⅰd」で使用したものと同じです。教科書を持っていない人は、第2回講義時までに入手しておいて下さい。詳細は第1回の講義時に担当者と相談して下さい。	
参考URL		
ベンチマーク		